

ベルクソン哲学の運動にまつわる有機体性について

文学研究科哲学専攻博士後期課程満期退学

中根 弘之

0. 序

ベルクソンは講演「変化の知覚」¹において、様々な「哲学上の困難」(PM 1366)を引き起こす原因が、我々の変化や運動に対する理解の不十分さにあることを指摘している。確かに我々は、外的対象や我々自身の変化と運動に日々触れており、変化や運動について十分知っていると考え、何の疑問も抱いていない。しかし、ベルクソンは、「日常、我々は変化を眺めているが変化を覚知していない。変化について語っているが、変化を考えていない」(PM 1366-1367)と、我々の変化や運動に対する日常的な認識を批判する。ベルクソンは、自らの持続理論を展開した『意識に直接与えられたものの試論』(以下『試論』と略する)以来、ゼノンのパラドクス批判を主要著作で繰り返し行っているが、それはそこに哲学において何よりも重要な問題があると考えているからなのである。

私は昨年度、別稿論文において『試論』と『アリストテレスの場所論』における、ベルクソンの空虚概念について検討し²、運動が展開する場として空虚な延長を必要としないベルクソンの運動の観念の独自性について論じた。ほぼ同時期に執筆された『試論』と『アリストテレスの場所論』では、空虚の概念や空間概念における扱いの細部が異なり、『試論』以後、後年のテキスト群との連続を考えるうえでこの差異は大いに示唆に富むものであった。そして私はその結論部において、ベルクソンが読み取ったアリストテレス的な自然観が後のベルクソンの場所概念に少なからぬ影響を与えている可能性を指摘した。『試論』以降のベルクソンは、アリストテレス同様に空虚な間隙や空間の概念の現実存在を明確に否定するが、その際、運動の本質に迫るためにベルクソンが採った論理とはどのようなものであるか。ベルクソンによれば、アリストテレスは個々の運動を一つの総体の運動に、一個の生物的存在の運動に集約しているとされる³。ベルクソンは、このアリストテレス解釈で得た観念を自らの内に取り込み、発展させたのではないだろうか。本稿は、その結論を確かめる意図の下に、生物的存在の総体を理解するための概念としてベルクソンが『創造的進化』で用いた有機体概念を軸に、『物質と記憶』や『創造的進化』、講演「変化の知覚」といったテキスト群を検討するものである。

キーワード

運動、不可分性、持続、有機的宇宙

1. 運動の不可分性

運動の有機体的性質を考える時、我々が何より注目するのは、運動そのものが持つ不可分性である。有機体は、種々の部分から構成されるが、常にその全体との連続性とともにある。仮に、部分が全体から切り離されてしまえば、それはもはや部分であることを止め、部分は独立した一つの別の存在物になるであろう。部分は全体に、全体は部分に結び付くからこそ一つの有機体と名指されるのであって、本質的に区分不可能な契機を我々は有機体的な契機とみなすのである。

これに対して運動はどうであろうか。我々は一般に、時間と空間によって運動を区分しようと試みる。運動とは、運動体が刻々と空間上の位置を変えることであり、ある時点にある空間上の位置を占めていた運動体が、別の時点に別の空間上の位置を占めることであると考えられている。つまり我々の意識は、そうした諸々の瞬間と位置を総合するものとして運動を捉えているというわけである。

しかし、バルクソンはそこに運動理解の不徹底を見るだろう。上記のような一般的な運動理解は、そもそも運動を空間上の位置に置き入れ、空間を運動の場所とみなすことを前提としている。

どのように運動は、運動が経過する空間に当てはまる *s'appliquer* ことができるのか。どのようにして動くものが不動なるものと一致するのか。どうして動く対象が行程上の点に存在するのか。運動が行程上の点を通る *passer* ことは、言い換えれば、運動が行程上の点にあり得る *il pourrait y être* ということである。運動が点上に止まれば、運動は点上にあることになるが、止まらなければ、それはもう我々が関心を持つ同じ運動ではなくなる。行程上に停止がない場合には、その行程は常に一跳び *un bond* で通過する。その一跳びが数秒続くにしても、数日、数か月、数年続くにしても、それは重要ではない。その一跳びが単一のものである限りは、その一跳びは分解できない。(PM 1378)

バルクソンによるゼノンのパラドクス批判は、上記の論述に根拠を持つ⁴。運動は運動する対象が通過する位置の集合ではない。なぜなら、運動体は運動している限り、空間を占めず、空間を通過しているからである。運動体の運動を、一定の瞬間に運動体が占める空間の諸位置の総合とみなすことの不都合さは、まさにここにある。運動体が占める位置は運動の部分ではない。なぜなら、空間上に存在するとされる運動体の位置は、運動を停止させることによってしか生じさせることができないからである。全体としての運動を分割し、運動体が占

める一定時点の一定の場所の集合とみなすためには、運動を停止させなければならない。止まり得る、という停止の可能性を持ち込んで、運動を分解することは、運動そのものの分解することではない。つまり、空間上の位置の集合という観念は、運動そのものを指し示せない、というのがベルクソンの主張なのである。

確かに、「我々は運動に対して、それをいくつかの不動的なものから作られると推理し、運動を眺める時、運動をいくつかの不動的なもので再構成する」(PM 1380) 逃れがたい習慣を持っている。この習慣については後で検討するが、ベルクソンはその習慣の有用性を一方で認めつつ、決してそれが運動の實在に迫るものであるとは考えていない。ベルクソンが不動的な契機を運動に持ち込むことに反対する理由は、不動的な契機が停止する可能性という観念にのみ依拠し、決して実在的なものではないと考えるからである。

実を言えば、仮に不動を運動の欠如であると理解するなら、真の不動は決してない *il n'y a jamais d'immobilité véritable*。不動は平行した事象そのものであり、我々が不動と呼んでいるものは、二本の線路上を、同じ速さを持ち、同じ方向に走る列車で生じる場合に起こるようなことに似た状態なのである。(PM 1378)

したがって、ベルクソンにとって実在しない不動によって実在する運動を再構成しようという目論見は、そもそも不当なのである。我々が「不動的なものが実在でありえる *l'immobilité peut être une réalité*」(PM 1380) と主張し、その前提に基づいて運動を部分化することは、もはや運動を運動として捉える作業に置いて最初から失敗していることに他ならないのである。

ここでベルクソンに従い、不動が実在するものでないとすれば、先に見た運動の把握の始発状況からして書き改める必要が生じるであろう。我々は、まず不動の対象を空間の上に置き、次に運動が対象に加わると考えるが、その始発状態にあるはずの対象の不動が否定されてしまうからである。そしてさらにベルクソンは、我々の常識に反する更なる要求を運動の把握の場面に求める。

いくつもの変化はある。しかし、変化する諸事物はない。変化は支えを必要としない。いくつもの運動はある。しかし、自発運動する力がなく、変わらない対象 *d'objet inerte, invariable* が動くのではない。運動は運動体を含んではいない。(PM 1381-1382)

ベルクソンにとって運動は、運動それ自体として捉えられるものであり、不動である対象に加えられる属性ではない。対象の同一性の下に、位置の諸点を総合するという仕方で運動を把握することは、ベルクソンの想定する運動の不可分性とは相いれないものなのである。

2. 可分性の契機と常識

上記のような、ベルクソンの主張を受け入れるとして、我々は、どのように運動を捉え直せばいいのだろうか。我々が運動を運動として捉える際には、運動体が刻々と位置を変える事実立つ他なく、位置こそ運動の構成要素に他ならないように思われるのである。しかし、ベルクソンは、運動を異なる位置の総合とみなす立場が、そもそも運動体の未来位置にのみ関心があって、運動そのものに関心がない立場であることを注意する⁵。先に見たように、空間上の運動している限りで、運動体は空間の上を「進行 progrès」(DI 75) し、「通過 passage」(PM 1380) する。この進行や通過こそ運動であり、空間上の位置はその進行や通過の仮想された停止位置に他ならない。この時、仮想的な停止位置を集めても停止位置の集合にしかならず、運動そのものは再構成されないとベルクソンは指摘するのである。

『思想と動くもの』の緒論第一部の記述が真実ならば、若き日のベルクソンは、運動に対して我々が無関心であることに「非常に驚いた」(PM 1254) とされる。そして彼は「それまで関心を持っていなかった内的生活の領域 le domaine de la vie intérieure」(PM 1255) に向かったという。なぜなら変化や運動が、これほどもなく事実的に現れているのは、我々の内面世界に他ならず、「持続を感じ、持続を体験している on la 【durée】 sent et on la vit」(PM1255 【】内は引用者補足) その点から出発しようと考えたからである。

事実我々は、自身の内面に生じた変化や運動を、空間上の位置に置き入れることなく把握することができる。言語的表象を媒介せずに捉える限り、という限定が必要とされるが、言語的表象に回収しえない自身の内面の変化や運動を我々は感じ取ることができるので、『試論』第一章における意識状態の諸検討を受け入れることはできるだろう⁶。問題は、我々が外的実在に触れるその点にある。運動の本質とは関係のない静止や位置の観念が、運動の把握に持ち込まれるのは、外界との関係にあるのである。この点に関するベルクソンの論述は『試論』とそれ以降の著作の論述と異なる部分もあるが⁷、外界の実在との接触において不動性、可分性がもたらされるという点において、ベルクソンは極めて一貫しているのである。

この点を『物質と記憶』のテキストに依拠しながら細かく検討してみよう。

意識と科学の他に、生活 la vie がある。哲学者たちがとても念を入れて分析した思弁の諸原理の諸原理の下に、研究をなおざりにされ、単純に我々が生きること、言いかえれば行動することの必然性によってのみ説明される諸傾向がある。(MM 333)

ここで主題化される「行動することの必然性によってのみ説明される諸傾向」こそ、連続した継起として与えられている所与を不動の諸契機に区分することに他ならない。ベルクソンによると、「諸行為によって自らを顕すという個体的意識に与えられた権能」(ibid.) が、自らと他の諸実在を区別し、さらには区別した他の諸実在を自らの欲求に合わせて、種々の対

象として切り分けていくのである。そして、「仮に、最初の事象 *réel* の区分が、直接的直観より、おおよそむしろ生活の根本的な欲求に応答するものであるならば、どうしてより更なる区分を推し進めることで諸事物により接近した認識が出来るのか」(MM 334) と問いかける。連続する継起を不動の諸契機に区分するというこの原因がもとより、生活上の必要に答えるものである以上、その区分の原理から我々の欲求を仮に抜き去り、あらゆるものを併置することを許す空間の概念を導入したとしても、この初めから実在を捉えることは不可能なのだ、と言いたいわけである⁸。我々が運動を運動体とその異なる位置に区分し、それらの契機を総合したとしても、それはもとより運動が持っていない原理によって区分し、それを「総合」という語で結びつけているに過ぎないのである。我々は「物質的利害から言えば見ない方がいいものから目をそらす」(PM 1372) のであり、外的実在に触れている時に視線の外に置かれるものが変化であり運動なのである。

そしてさらにベルクソンは、こうした区分によって、対象とされる現実存在が持っていない性質が付与されるという。

なぜ我々は固体的な原子を考え、衝突を考えるのか？ それは最も明白にその一部を我々が用いる物体であるところの固体的なものたちが、我々と外界の関係の内でも最も関心を持つところのものであり、そしてまた接触が、我々の身体によって他の物体を動かすために我々の手にするであろう唯一の手段であるからである。(MM 335)

我々は生活に対する欲求から、知覚の内に不可入性を有する固体の性質を持つ対象を求めるようになっているのであり、どれほど流動のことを考えてもその中に固体としての微粒子の姿を認めようとする。「物質よりも諸物体 *moins la matière que les corps*」(MM 334) を我々は求め、流動する物質は微細な物体の接触的連鎖に置き換えられて解釈されることになるのである。「我々は不動を必要とする」(PM 1378) からこそ、こうした解釈は生じたものであり、それ以外に原因は求められない。運動が不動の対象に加わると考えること自体は、この世界に生き、外的実在に働きかけなければならない以上、「実生活の場面で道理にかなうことこの上ない」(PM 1379) ことであるが、運動そのものを知る態度とは程遠いのである。

3. 不可分な総体

これに対して、運動の不動に対する優位性や運動の現実存在を主張できる根拠は、運動の感覚を我々が意識の所与として感じ取っているという事実に他ならない。実際、ベルクソンの指摘を受け入れ、我々の感覚世界に立ち戻れば、その答えは容易に得られるだろう。我々自身どれほど不動に専心しようとしても、完全な静止を保つことは不可能であり、不動の対象を知覚するには、意識の所与にまつわる動的所与を捨象しなければならないのである。そ

ここで我々は、ベルクソンが言うように、静止は我々が生活のために導入した観念であるともみ
なすか、意識の所与が示す事実⁹に抗し、運動を実在ではなく仮の現象であるとする他無くな
るだろう。運動と不動が矛盾関係にある概念である以上、「運動が全てであるのでないのな
らば、運動は虚無 rien である」。(PM 1380) 我々の日常は、事実的に与えられる運動の感覚
を生活の必要性から空間に固定するという状態にあるが、運動を運動として捉えようとすれ
ば、静止の契機を排除し尽くさねばならなくなるのである。

こうしたこれまでのベルクソンの立論に立てば、我々の世界にある運動は、以下のような
ものとして描写される。

どうして我々は、物質的延長について原初的に覚知された連続性をそれぞれ実体とその不
可分性を持つ物的なようなものに細分化しようとするのか。確かに、この連続性は、そ
れぞれの瞬間にその様相を変化する。しかし、なぜ、条件なしに、あたかも万華鏡を回転
させたように、総体 l'ensemble が変化したと我々は認めないのか。(MM 333)

区分を排除する限り、原初的に覚知されるのは「総体」を為す連続性であり⁹、それ以外の
ものではない。我々が個々の運動を切り出さないかぎり、全ては全体としての総体の状態変
化に結び付けられ、部分と全体の紐帯は、あたかも有機体がそうであるように、不可分なの
である。『物質と記憶』第四章において展開される、運動に対する第四命題「現実的運動は
事物の移行ではなく、状態の移行である *Le mouvement reel est plutôt le transport d'un état*
que d'une chose」(MM 337) は、極めて有機的な連関を運動に与えるものなのである。

こうして、諸事物の運動という観念は放棄され、全てが総体の状態変化に還元されること
になる。区分の原理を排除してしまえば、運動は運動体とその場所に区別されることなく捉
えられ、輪郭を持った運動体もその占める場所も存在しないばかりか、さらには様々な運動
に区分をたてられないのであるから、全ての運動は分かちがたく結びつくことになる。しか
しだからといって、総体を為す諸契機そのもの間には差異が存在する事実を忘れてはなら
ない。有機体内の部分が全て同質でないのと同様、総体の中に差異は認められるのである。

実際、我々が原初的に覚知している連続性を物体に切り分けて対象とする時、その区分が
完全に恣意的なものであった場合、区分自体の有効性は極めて低いと言わざるをえないだろ
う。区分が有効性を持つ限りにおいて、区分の根拠となる差異は疑いもなく存在し、それは
人々によって容易に受け入れられるものなのである。その点で、純粹空間のような質を欠い
た「等質的で空虚な場という概念は取り分けて並外れたもの」(DI 65) であるにしても、空
間の概念の根拠となる差異は実在し、その差異の解釈の為に、空間の概念が用いられてい
るのである。

この総体の中に存在する差異は、区分の原理を排除したがゆえに量的差異をたてることが

できない以上、質的な差異であることは容易に想像される。そもそも運動の根拠となり、刻々と状態を変える総体は、我々の意識が感じ取る意識の所与に依拠して得られたものである点からもそれは明らかである。『試論』第一章で検討されたように¹⁰、我々の意識の所与は全て質的な契機に他ならず、量に還元されることが禁じられているからである。

そこで、この質的な差異を内に含めた総体の状態の移行を我々は、どのように捉えるべきかを検討しよう。しかしこの総体を為す質的差異の検討に対して我々は、違和感を覚えるべきであろう。なぜなら、質的差異が純粋に質的差異である限り、その差異は不可約であることを前提しているの、仮に、諸々の契機の質的差異を乗り越えて総体としての統一を与える契機が与えられてしまえば、そこに質の差があると結論することは不適當であるかのようと思われるからである。『試論』においてベルクソンは、我々の意識の状態の質的差異を主題化し、その相互浸透した意識状態の継起に対して持続という術語を用いた。この時、質的差異を持つ諸契機は「意識の状態」という共通の土壌において議論されているので、質的差異が存在していたとしても、意識の状態という総体を為すことは前提されている。しかし、宇宙そのものを総体であると捉えた時、質的差異を超えて宇宙を総体としてまとめさせる働きはどのように与えられるのか。この点において、ベルクソンは、質的差異を持続のリズムの観念の元に質的差異を超える契機を提示しているように思われる。

実際、持続に唯一のリズムがあるのではない。より緩慢であるか急速であるかという異なるリズム、それによって意識の緊張と弛緩を推し量り、そのことによって存在の系列におけるそれら自身の位置を見定めることのできる異なるリズムというものが想像される。(MM 342)

この持続に関する論述からベルクソンは、種々の質的な差異を持つ契機の混在した宇宙を語るように見えて、その実、一元的に持続する宇宙を語っていると理解される¹¹。宇宙は、あたかも一個の意識のように存在し、その中に種々の状態が見いだされる。我々の感覚や感情がそれ自体一つの質を持ち、独立しているかのように見えても総体としての意識の状態に収められているかのように、宇宙の質的差異を持つ諸契機も巨大な宇宙の中に持続して存在しているものなのである。それゆえ、リズムが異なり、独立した諸実在のように見える宇宙の諸契機も、もともと持続なのである。したがって、宇宙を構成する諸実在はそれぞれが質的差異を持っているかのように異なる現れ方をしたとしても、その差異が不可約であるということにはならない。全ての実在は持続であり、そのリズムが異なることによって、実在間の差異は説明可能なものとなるのである。その意味で諸実在の総体は、持続の総体の中に含まれるものとなるのである¹²。

しかし、『試論』において意識の状態に対して用いられていた持続を、宇宙を構成する実

在の全てに当てはめるということは、対象となる諸実在の差異を無視した立論ではないのかという批判も当然出るであろう。この点、継起する対象の状態が我々の意識の状態と同様に持続しているとみなす根拠は、両者とも事実的に運動する、ということに他ならない。不動や静止が存在しない宇宙にあって、意識存在である我々と対象となる存在は、常に変化、運動しているのであり、その差を生み出すのは、変化や運動のあり方の差異なのである。意識の諸状態を貫く働きと、異なる位置を通過する働きは本質において同じものであり、異なるのは働きのありようなのだ、という訳である。ここでさらに否を唱え、意識の状態は、我々の内面にある延長を含まない契機の持続であり、外的対象の延長上で行われる運動と同種のものであるはずがないと述べたとしても、ベルクソンが意見を変えることはないであろう。場所として置かれる、空虚な空間の現実存在を否定するベルクソンにとって、延長と非延長は可約的な契機であり、両者の関係は連続性を持つのである¹³。たとえば、我々は赤色光線を知覚した時、それを赤い光であると認識する。この赤色光線は、科学的に考えれば一定波長の光線に他ならず、それは延長を占める運動である (MM 340-341)。しかし、我々は、この振動を我々の内に「凝縮するcondenser」(MM 342) ことによって、赤い光の知覚を得る。この時、赤い光の知覚は非延長的な意識の状態であるが、それが延長的な振動と断絶しているとは誰も考えないであろう。延長を占める事物の運動はそれ自体で非延長的で質的な知覚になりえるし、またその逆に、意識的な身体の運動によって延長を占める運動は行われえる、というのがベルクソンの立場なのである。

4. 有機体性質

しかし、まだ問題は残るだろう。『物質と記憶』では、それら持続の並存と不可分な連関を明らかにしたが、そもそもどうして異なるリズムで展開する持続が存在し、互いに連携し合い、総体を為し続けているのか。この問題に対してベルクソンは、『物質と記憶』に続く『創造的進化』において、その答えを積極的に扱っており、その答えとして見いだされるものが有機体の概念なのである。

ベルクソンが有機体の概念を提示するのは、「上りmontée」(EC 503) のリズムを持つ意識の持続と、「下りdescente」(ibid.) のリズムを持つとされる物質が持つ持続について述べられた後の箇所である。有機体、生物は、物質的な諸契機と同様に「残りの延長étendueと結びつく一片の延長からなっており、全体と連帯し、物質を支配している物理学や化学の法則に従っている」(EC 504)。しかし、そのあり方は、物質のそれと大きく異なり、「互いに補完する異質な諸部分」からなっており、「互いに含みあう諸機能を遂行する」(ibid.) 一個の「*individu*」(ibid.) を為す閉じた体系である¹⁴。そしてまたこの閉じた体系は、永続的に存在する為に自らを分化する生殖をおこなうが、そのことによって閉じた体系を放棄する傾向を持っている。つまり、一方で諸契機を自らの内に部分化し、閉じようとする働きと、

他方で細胞分裂がそうであるように、絶えず分化する働きを内に含むものが有機体なのである。

この有機体に関するベルクソンの主張の核心は、「上り」と「下り」のリズムを持つ持続の混在状況という観念である。この観念は、先に見た『物質と記憶』における総体の論述と極めて近い構図からなり、「緊張」(MM 342)と「弛緩」(*ibid.*)という対立する持続のあり方が、上りと下りに対応する。しかし、『創造的進化』では、この有機体的性質を持つ持続の総体に進化の意味づけがされ、「上り」の持続のリズムが自らを下りの持続のリズムに「自分のリズムを押し付ける *impose son rythme*」(EC 503)と述べられている点が異なる。『創造的進化』においては、持続の相互浸透が主として上りの持続の側から行われ、その結果として具体的な個々の有機体、生命を形成するという仕方でそれが発展しているのである。

しかし、そうなると、もはや抽象物のように、また全ての諸生物を書き込む見出しのように生命一般 *la vie en général* を論じる必要はないだろう。ある特定の瞬間に、ある特定の場所で、はっきり見て取れる流れ *un courant* が生じた。この生命の流れは、その都度その流れが有機化する諸物体を通り抜け、世代から世代に移り行きながら、決してその力を失うことなく、むしろ進むにつれてその力を増しながら諸々の種、諸個体に散らばった。(EC 516)

ここで示される「流れ」は「生の躍動 *élan vital*」(EC 708)の異なる表現であることは言うまでもないだろう¹⁵。有機体は、「上り」「収縮」の方向の持続からのみなるのではなく、「下り」「弛緩」の方向と結びつくことで有機体として存在するのである。

しかし、傾向の異なる持続がどうして分かちがたく結びつき得るのか。その答えは、それが有機体の生殖と同じく、同一の持続から分かれたものであることによる。

仮に、我々の分析が正確なものであるなら、意識、いや超意識 *supraconscience*こそが、生命の起源なのである。意識または超意識は火簾 *fusée* であり、その火簾の消えた燃えかす *débris* が落ちて物質になる。そして、未だ意識は、火簾そのものの中にあり続ける燃えかすを貫き、有機体として燃えかすを輝かす。(EC 716)

極めて比喩的な表現だが、この表現の中に物質と生命の関係が示されている。ベルクソンにとって物質的な契機は、元を同じくする持続の「反転」(EC 696)や「中断」(EC 703)であり、また「落下」(EC 705)である。物質の持続は、互いにその内なる契機の中に疎外性を持ち、それぞれの契機が総合ではなく分解に向かう傾向を持っている。意識的な持続が様々な契機を浸透させる働きであることを考えれば、まさに物質の持続はその逆の方向に向かうもので

あると言える。たとえば、一つの直感に導かれた詩人が実際に詩を創作する場面を想定してみよう (EC 672-673)。一つの直感に基づく詩は、その中に様々な意味の要素を溶け込ませた一つの想念に他ならない。そして詩人は、現実の詩の創作において、それらの要素を様々な書かれた文字や発話される言葉として表現し、詩を完成させる。この時生じていることは、一つの想念を多数の文字や言葉に分解しているということに他ならず、しかもこの分解がなされなければ、創作は可能ではない。これと同様に、物質的持続も、諸契機の統一ではなく分散の方向に向かうが、それ自体宇宙の創造に欠くことのできない事態なのである。確かに、詩人の直感を離れた言葉は、その一つの語だけ切り取ってしまえば、日常の言語体系の中で詩人の直感を読み取ることは困難だろう。しかし仮に、詩人の直感と分かちがたくその語が用いられるなら、一つの語であっても詩人の想念を読み取ることに困難はないに違いない。詩の想念と、それを顕す文字や言葉の緊張関係は、有機体の内にある諸契機を総合して閉じた個体を生み出そうとする傾向と、生殖を通じて多数の個体に分裂する傾向の緊張関係と類比的なものなのである。そして、詩人自身も、あるいはその詩に触れた者も、分解された結果としての文字や言葉の表現を通じて、新たな想念を生み出すこともありえる¹⁶。ベルクソンの『創造的進化』における生命の進化の創造性は、一見して相反する傾向を持つ持続の分かちがたい連鎖を必要とするのである。

以上のことから、創造的な生命にとって、物質的な持続が必要であることは明白である。なぜなら物質は文字通り生命にとって素材を為し、生命維持のためのエネルギーを与えるからである。しかし、逆に、物質にとって生命は必要不可欠な契機であるだろうか。ベルクソンはそれを必要な契機であると考え。確かに物質は、「幾度でも繰り返される」(EC 500) 定まった性質を持ち、我々の知性に裏打ちされた科学によって予見可能な運動や変化を起こしている。しかし、一つの現実が我々を引き留める。

一杯の砂糖水を作るには待たなければならない。(EC 502)

仮に、物質に関する全ての契機が定まり、その性質が現在与えられたもの以上のものを含まず、後はその内にある諸契機を分散することだけだとするならば、権利上、物質の運動や変化は「扇のように一挙に展開」(*ibid.*) することが可能であっても構わないはずである。しかし、現に今、与えられたもの以上のものを含まない物質的対象であっても、その運動や変化が達成されるために時間を要する。ベルクソンは、ここに「上り」の傾向を持つ生命の持続による関与を見出す。物質は、諸契機を疎外する働きを持ち、そのまま放置されている限り、所有するエネルギーを消費してしまう存在である¹⁷。それに対し「生物は物質的変化の歩みを止めることはできないが、それらを最後には違らせるには至る」(EC 704) ののである¹⁸。物質の持続が物質の持続であり続けるために生命の持続は不可欠であり、それがなければ、物

質の持続は早々にエネルギーを使い果たすとベルクソンは考えているのである。

以上のように、持続の総体は単に互いのリズムを浸透させているのみならず、その浸透が有機化と呼ばれる限りにおいて生命の持続に創造をもたらし、物質の持続に分解の危機を去らしめるものとなる。我々が目にする微小な運動であっても、この総体を為す全持続の有機化作用の結果現れてくるものであって、それ以外ではない。仮に全く非生物の対象の運動であっても、生命の持続がそこに浸透し、有機化作用が生じているがゆえに、結果が定まっていようと「待つ」必要がある運動となる。このようにして有機体的な性質は我々の宇宙全体の運動に備わっているのである。

5. 結

以上、検討してきたように、ベルクソン哲学における運動には、有機体性質が付与されることを明らかにしてきた。それは最初に何より徹底した不可分性という仕方で論述され、様々なリズムを持つ持続の総体という観念に至る。そしてさらに、「緊張」や「上り」の傾向を持つ生命の持続が、自らの持続のリズムを「弛緩」や「下り」の傾向と呼ばれる物質的な持続に押し付けるという有機化の作用によって、生命自らの創造を為し、物質の持続を維持させることになる。このようにして、我々が目にする運動はその意味で有機体的なものであり、個体的な独立した運動であっても、総体を為す巨大な宇宙の持続と切っても切れない関係にあるとされるのである¹⁹。

このような運動の理解は、運動概念を極めて壮大な宇宙論に包括する理論として位置づけられるものであろう。『アリストテレスの場所論』執筆から『創造的進化』執筆まで、その期間は十八年の時を経なければならなかったが、空虚な延長の实在を認めない運動の理解として有機体的、生命的宇宙を想定するという方法は確かにベルクソンの中で一つの結論を得たというべきである。しかし、ベルクソンにとって何より生命は意識であり、意識は持続である。アリストテレスの宇宙観とベルクソンのそれは、その点で根本から異なるものになった、と言えよう。しかし、なお、ベルクソンにはアリストテレス同様、運動に目的性を付与するという点で近いところがある。ただし、ベルクソンの目的性概念は、個体的な存在が内に有する目的性ではなく、あくまで一個の総体を為す宇宙的持続の目的性である点は、大きく異なる。

外的な目的性、それによって諸生物が互いに調和する外的な目的性を、人は受け入れず、進んで笑うべきものとする。草は牝牛のために、仔羊は狼の為に存在するとは馬鹿げたことだと、人は言う。(EC 529)

確かに、草が牝牛の為に存在し、仔羊が狼の為に存在すると発言することを、我々の多く

は認めないであろう。しかし、個体的な対象ではなく、全ての持続が溶け込んだ総体を念頭に置けば、その意味は異なってくる。ベルクソンにとって、個々の諸実在の外にある、総体を為す宇宙的持続が、目的性を持った主体なのである。さらにベルクソンにおいては、形相を目指すアリストテレスの運動と、「予見不可能な新しさ」(PM 1331)の創造を目的とするという点で異なる性質を持つと言えるだろう。ベルクソンにとって宇宙に存在する運動は、創造や発明の過程で現れるものなのであり、非有機的、非生命的事物の運動であっても、その創造に寄与する働きと分かれたるものではないのである。以上、本論は、ベルクソン哲学における運動に備わる有機体性質について検討し、極めて独創的な宇宙論に繋がる論点を明らかにしたものである。

¹ 使用したベルクソンのテキストは、Bergson,H.,1991,*HENRI BERGSON ŒUVRES* 5^e édition, Presses Universitaires de France である。収められている著作、論文に関しては、以下の略語を明記し、引用箇所や参照箇所のページ数を明記する。また、2007年から版を改めて出版された Quadrige 版も適宜参照した。なお本文中に引用した箇所の傍点強調は、全てベルクソンによるイタリック強調である。

Essai sur les données immédiates de la conscience ... DI

Matière et mémoire ... MM

L'Évolution créatrice ... EC

La Pensée et le mouvant ... PM

² 中根弘之、2016、「ベルクソン哲学における運動と空虚な空間の問題について」『東洋大学院紀要第52集』文学研究科 <哲学>、pp.151-166. 参照。

³ この拙論が主張した論点について、François も注目した解釈を行っている。François,A., 2012, Sur quid Aristoteles de loco senserit de Bergson, Worms,F.(ed.), *Annales bergsoniennes V Bergson et la politique : De Jaurés à aujourd'hui*, Presses Universitaires de France,pp337-378. 参照。

⁴ 運動と運動体が通過する行程を混同ことの誤りに関する論述は、『試論』以降一貫している。DI 74-76 参照。

⁵ 科学がこのように位置に固執するのは、科学の役目が「予見すること」(PM 1255) であるからに他ならない。科学は、未来の一時点に運動体が占める可能的な位置はどこなのかを求めており、その際に継起それ自体を等閑に付すことが前提されるのである。

⁶ 試論第一章の強度に関する検証、とりわけ、「深い感情」と「表象的感覚」の対比を参照。DI 9-51 参照。

⁷ 中根 2016 でも検討したように、『試論』においては外的世界に相互外在性が実在するかのよう

- な論述が確かにみられ、空間という語も実在性を持って語られている。DI 80 参照。
- ⁸ ベルクソンは科学を外在的実在に対する我々の常識の延長にあるとし、実在の「一部分を切り取っている」ものであることを主張している。しかし、科学に対する主張については、論文「形而上学入門」において否定的に扱われていたのに対して（PM 1392-1433）、「科学が実在の本質に到達することができる」（PM 1285）と述べる『思想と動くもの』の緒論の論述の間には、ベルクソン自身も注で挿入したように、明確な差異がある。
- ⁹ ベルクソンは、「総体」という語を「このイメージの総体 *cet ensemble d'images* を物質と呼ぶ」（MM 170）という表現で、『物質と記憶』の第一章段階で用いており、外在的世界のあり方について、第四章の記述と重なっている。
- ¹⁰ 『試論』第一章の検討を参照。とりわけ本稿と関わる筋肉努力の検討（DI 17-21）、情感的感覚と表象的諸感覚について検討された箇所（DI 24-50）を参照。
- ¹¹ 桧垣はドゥルーズのベルクソン解釈と重ね合わせる形を採りながら、ベルクソンが総体としての宇宙的持続を立論することから、持続存在の単一性に注目する。なおドゥルーズによる解釈は、『物質と記憶』や『創造的進化』に加え、『持続と同時性』における宇宙の時間は一つである、というベルクソンの論述に注目することで成立している。加えて、最新の論述としてデューリングの同時性への見解も参照されたい。桧垣立哉、2000、『ベルクソンの哲学 生成する実在の肯定』、勁草書房、pp.223-276.、Deleuze,G.,1968,*Le Bergsonisme*, Presses Universitaires de France,pp.71-91.、デューリング、E.、2016、「共存と時間の流れ」（清塚明朗；訳）『ベルクソン『物質と記憶』を解剖する』平井靖史、藤田尚志、我孫子信編、書肆心水、pp.270-305. 参照。
- ¹² この点についてベルクソンは『物質と記憶』第一章のイメージ論の中で同様の主張を行っている。事実、先の第四章引用箇所で使用されていた「万華鏡」の比喩は、第一章中 MM 176 で用いられている。MM173-177 参照。
- ¹³ 延長と非延長の可約性については、MM 344-356,373-374 参照。
- ¹⁴ ベルクソンは、個体性に度合を認めている（EC 504）。この箇所では世代を超える生殖活動に焦点が当てられているが、生殖するということは別の個体を生み出すことでもある。つまり、宇宙の共時的多様性を裏打ちしているのは通時的多様性である、という論理構造を為している。
- ¹⁵ ベルクソンは、「生の躍動」に対する他の表現として、「四つ辻に吹き込む一陣の風」（EC 537）、「蒸気の噴出」（EC 706）などを用いている。とりわけ後者において、噴出する蒸気とその蒸気が冷えて落ちていく水滴の比喩は「火簍」を用いた比喩と重なっている。
- ¹⁶ この点については、「仮に生命が純粋な意識か純粋な意識、いわんや超意識であったなら、生命は純粋な活動的創造になったであろう。実際には、生命は、自動力を持たない物質の一般法則の下に生命を置く有機体に固定される。」（EC 703）という表現が示すように、有機体化運動そのものが全て肯定的に扱われているわけではない。事実、生命進化において、人間を除く生物種の多くが、物質的法則の下に活動性を眠り込ませてしまうからである。

- ¹⁷ 物質のエネルギーが崩壊過程にあることについてベルクソンは熱力学の成果を取り入れ、エントロピー概念を用いて説明している。EC 701-703 参照。
- ¹⁸ 宇宙の有機化について、ベルクソンの主張は一見して奇妙に思われるだろう。なぜなら、我々が科学によって教えられる生命の歴史は、物質の歴史の後に位置づけられるからである。意識的持続を示す生命が物質に先んじて存在し、それが物質の持続と創造を繰り広げるとい主張はその点で生命の歴史に対する科学の主張と対立する。しかし、ベルクソンは我々が住まう太陽系外にも生命が存在しうる可能性を示唆し、太陽の光線が太陽系の内に局限されない以上、宇宙全体の連関の中で考えれば我々が知らないだけで、地球に生命が誕生した時、物質に先んじて生命が宇宙のどこかに存在していた可能性を仮説として挙げている。EC 711-713
- ¹⁹ 本論の論点とは異なるが、ベルクソンの運動の観念を検討して論じられたものとして Kouba の検討も一読されたい。Kouba,P.,Le mouvement entre temps et espace (Bergson aux prises avec sa découverte), 2004,Worms,F. (ed.), *Annales bergsoniennes II Bergson, Deleuze, la phénoménologie*, Presses Univeritaires de France,pp207-225. 参照。

Sur l'organique du mouvement chez Bergson

NAKANE, Hiroyuki

Bergson dit que si le mouvement s'applique sur l'espace, et il se descompose dans tous les points du trajet que le mobile parcouri, il n'est rien. Selon Bergson, le mouvement n'inclut rien des arrêts, mais il est un progrès indivisible. Tous les mouvements sont la même durée que nous sentons en nous.

Mais, nous avons l'habitude inévitable de diviser la continue en les éléments. Ce notre habitude a été formé, en s'adaptant la nécessité de la vie qui nous fait agir le monde extérieur. Parce que la nécessité nous exige de la division sur le monde, nous ne pouvons pas accepter naturellement un progrès indivisible. Alors, si nous voudrions retrouver la continuité dans le mouvement, il faut se détacher de la attention pratique sur le mouvement.

Que nous sentissions directement le mouvement même, nous trouvons la durée partout au monde. Dans *L'Évolution créatrice*, Bergson dit que l'univers dure. L'univers est l'ensemble des durées qui ont des rythmes différents. Dans l'univers, la durée de la vie impose son rythme à la durée de la matière, et elle organise les éléments de la matière. Cette organisation entre les durées différents créent les corps nouveaux, donc elle fait évoluer l'univers. Tous les mouvements se déclarent dans la création et ils participent à cette organisation.

mot-clefs :

le mouvement, l'indivisible, la durée, l'univers organique